

日本語アクセントの再建*

上野善道

(東京大学)

キーワード：日本語本土諸方言，アクセント祖体系，下降式，高起群，低起群

1. はじめに

かつて、拙論（1988）において、それまでの通説とは異なる日本語本土方言アクセントの祖体系案を提示した。高起群について、従来の「高高高高…」の式音調を改訂して「高高中中…」の音調を立てるというものであった。本稿は、新しく論を展開するのに先立ち、2節で基本的な前提事項を述べた後、旧稿の考えをやや詳しく紹介する（3～5節。詳しくは旧稿を参照のこと）。ついで、その後に出された拙論への批判を取り上げ、それらに対する私見を述べる（6節）。最後に、低起群に去声始まりのアクセント型などを組み込み、現在考えている本土方言祖体系の全体を示すこと（7節）をねらいとする。

なお、本稿は「日本語アクセントの再建」と題しているが、今回対象とするのは本土方言だけである。本来は琉球方言までを考察の対象にしてはじめて表題の要件を満たすことになるのであるが、近年研究が進みつつあるとは言え、琉球方言のアクセントはまだまだ不明の点が多くある。これについては今後の研究課題として、今回の対象から省くことにした。その意味で、正確には「日本語本土方言アクセントの再建」である。

* 本稿は、2006年6月17日に東京大学駒場キャンパスで開かれた日本言語学会第132回大会で行なった会長就任講演の内容を文字化したものである。そのときの配布資料の中に付けておいた下降式音調の分布図に不備があったので地図は省略し、その内容を脚注3に回すなど、若干の補訂をした。

2. 前提事項

最初に、本稿の前提となる事柄として、表記法、類別語彙、祖体系推定の考え方について述べておく。

2.1 表記法

表記法は、音調の変動に着目した動的表記である(1)を用いる。他の論文で高低の段階に着目した静的表記である傍線式や○●方式で表わされている場合も、(1)の表記に改めて引用する。この表記に慣れない人のために、カッコ内にその事実上の読み替えを記しておく。

(1) 表記法

- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| [拍間の上昇([○○]は「高高」) | [[拍内での上昇([[]は「昇」) |
|] 拍間の下降([O]○は「高低」) |]] 拍内での下降([[[]は「高降」) |
| ! 拍間の小幅な下降([O!○は「高中」) | !! 拍内での小幅な下降([O!!は「高-中」) |
| % 拍間の小幅な上昇(O%○は「低中」) | ○ 拍(音節かモーラかには立ち入らず) |

また、私の使う「拍」という用語は、通常使われている「モーラ」と同義ではない。アクセントの長さを構成する単位をさすもので、言語により方言により、音節であったりモーラであったりする(私見では、たとえば鹿児島方言の「拍」は「音節」であり、東京方言の「拍」は、近年主流の主張とは異なり、「モーラ」である)。

アクセント祖体系を考える際には、厳密にはその推定段階における音節構造の問題を切り離して論ずるわけにはいかないが、現段階では長母音・二重母音の存否、それと連動する、音節と区別されたモーラの存否など、詰めるべき課題は多い。したがって、本稿ではそれに踏み込むことはせずに、「拍」の名前で、事実上 CV 音節だけからなる語形のみを取り上げる。

2.2 「類別語彙」

日本語のアクセント史を考える上で必要不可欠な概念として「類別語彙」がある。現代諸方言と文献資料(とりわけ、平安末期の漢和辞典である『類聚名義抄』^{るいじゅみょうぎしやう})

の声点表示)における単語アクセントの対応に基づいて祖体系に立てられるアクセントの対立グループを「類」と呼ぶが、その所属語彙(その対応を実現している単語)が「類別語彙」である。ここで重要なのは、類が「アクセントのみ」に基づいていること、すなわち、意味や文法(機能)や語音(分節音)には関係ないという点である。たとえば、もしも語音の条件によってアクセントが相補分布をなしていることが分かった場合、それらのアクセントは対立しない可能性が出て来るからである。

類別語彙という用語は、あるいは他の分野の人には馴染みがなく、日本アクセント論だけで通用する特殊用語のように受け止められるかもしれないが、概念そのものは比較方法に基づく、ごく一般的なものである。

すなわち、音と意味の関係の恣意性を元に、言語・方言間に見られる対応が偶然に生ずる確率は極めて低いという考えに基づいて、それらは元は同じ形であったと想定して祖形を再構する。その原理自体は音素(分節素)とまったく同じである。唯一の違いは、アクセント(超分節素)は、被さる単位が「単語」であることである。「単語の中のそれぞれの音素」の対応にアクセント面で相当するのは「単語そのものの型」の対応なのであり、それゆえにこそ、アクセントは対応系列がそのまま「語類」として捉えられるのである。(2)の例を参照(ここに、||は対応の印、/ / は平進式、/= は無核型、/ / は下げ核)。(2)の対応グループがそれぞれ一つの「類」をなし、「風、酒、…」と「犬、色、…」がそれぞれの「所属語彙」となる(拙論 2000 も参照)。別の言い方をすれば、同じ対応をする語彙群をまとめたものが類で、その類が設定された段階で、それらが所属語彙と位置付けられる。

(2) 京都方言と東京方言との対応例

/○○=/ || /○○=/ 「風、酒、鼻、水、道、…」

/○]○/ || /○○]/ 「犬、色、花、耳、山、…」

この概念は、日本語アクセント研究の早い段階で E. D. ポリワーノフや服部四郎によって導入されたが、これを具体的な形にまとめたのは金田一春彦(1937; 1943; 1974)である。そのために、通称として「金田一の類、金田一語類、金田

一語彙」などの名称が使われている。具体的には(3)を参照。「2拍名詞第1類, 第2類, …」と呼ぶ。覚えやすいように, 所属語彙から取り出して名前を付け「庭鳥類, 石川類, 山犬類, 松笠類, 秋雨(ないし猿掣)類」と呼ぶこともある¹⁾。同様に3拍名詞は, 順に「形, 小豆, 二十歳, 頭, 命, 兎, 兜類」と呼ぶ習慣がある。

(3) アクセントの類(金田一の類, 金田一語類, 金田一語彙)

	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	2拍動詞	3拍動詞
第1類	柄, 蚊, 血, 戸	風, 鳥, 庭, 鼻	鯛, 形, 煙, 車, 魚	着る, 寝る; 売る, 置く	上げる, 捨てる; 上がる, 当てる
第2類	名, 葉, 日, 藁	石, 音, 紙, 川	小豆, 毛拔, 二つ, 夕	出る, 見る; 書く, 取る	起きる, 建てる; 動く, 下がる
第3類	木, 手, 火, 目	犬, 色, 花, 山	(小麦, 力, 二十歳)	(おる(居))	歩く, 隠す, 入る, 参る
第4類		息, 笠, 空, 松	頭, 男, 刀, 光		
第5類		秋, 雨, 猿, 鍋	朝日, 命, 姿, 涙		
第6類			兎, 鱈, 狐, 蓬		
第7類			苺, 蚕, 兜, 畑		

※代表例のみ。形容詞等もあるが省略。

(3) に関して, いくつか注意すべき点がある。

まず, その分類基準であるが, 最初に「名詞, 動詞, 形容詞」という「品詞」が上位概念となっている点が問題である。これは「文法」が介在していることになり, 上に述べた「アクセントのみによる対立」から外れてしまっている。アクセントそのものから見れば, 「2拍名詞第1類」の「風, 鼻, …」と「2拍動詞第1類」の「着る, 売る, …」(現代方言ではその終止連体形, 古代においてはその連体形)は同じである以上, これを分ける理由はなく, 「同一の類」としなければならない。「着る」と「売る」の活用の違いもアクセントの面からは問題に

1) 和田実の命名による(国語学会編『国語学辞典』旧版, 東京堂出版, 1955の巻末付録「国語アクセント類別語彙表」。表自体は金田一春彦との共同製作)。ただし, 第5類は「猿掣」類。民話に基づく命名であろうが, 現代生活では必ずしも馴染みがなく, 私は講義では「秋雨」類と呼んできた。なお, 全く独立に秋永一枝も「秋雨」類と呼んでいることを後に知った。また, 3拍語に関しては, 第1類の「形類」は「形」という単語のアクセントが諸方言でしばしば例外をなす(伊吹島方言もその一つ)点で, 必ずしもよい選択に基づく命名とは思われない。ただし, 第1類は語例はたくさんあるにもかかわらず, 適語がなかなかないという難点がある。現代語だけであれば, むしろ「魚類」か「車類」が適当であろう。

ならない)。金田一春彦(1974:76)も、最初に品詞で分けてそれに「類」の名称を与えたことを後に改め、アクセントのみで分類した概念には別の名称「群」をやむを得ず用いているが、今日でも一般には最初の「類」の名前が用いられている。本稿でも「類」の名称をそのまま用いて行くが、その位置付けについてはあるべき姿に戻して論じていくつもりである。

もう一つ注意すべき点は、「類」および「類別語彙」は、あくまでもその研究段階での仮説に過ぎないということである。対象とする諸方言(文献資料もその一つ)のデータをもっとも合理的に説明するために立てた仮説なのであって、確立した出発点ではなく、新資料の出現や新しい解釈によって変わりうるものである。予測や予言ではなく、その段階でのベストの仮説として出すものである以上、新しい資料の出現に応じて組み替えるのは、祖体系という仮説が持つ必然的な性質なのである。現に、多数の文献資料に基づいて金田一語類を見直し、文献上に現れる小数の語彙からなる新しい類を立てたり、一部の語彙の所属を改めたりした、いわゆる「早稲田語類」(秋永一枝他1997;1998)もその部分的修正案の一つである。本稿もまた、特に現代諸方言の立場から、金田一の類別とその推定音価(音調型)の両方に修正を加えようとするものである。

仮説に関連して言えば、金田一春彦自身、意見を変えている部分がある。たとえば(3)の3拍名詞の第3類「二十歳類」がそれで、所属語彙の少なさと、諸方言における対応関係がすっきりしないことから、論著によって立てたり立てなかったりしている。括弧に入れたのはその意味である。第2類(小豆類)も所属語彙が少なく、対応に不確かな部分がある。これらの類に限らず、3拍名詞は対応に問題があることが以前から知られている。本来、対応は古くから口頭で連綿と伝承されてきている日常語において成り立つものであるから、その地域での生活語でないもの、文字を通して入った単語など、伝承語でないものには当てはまらないのであるが、生活が激変した今日においてはその見極めが困難になることが要因の一つと考えられる。また、3拍名詞以外にも、金田一自身によって「何類に入れてよいか不明の語」で括られている語彙も一部ある。

また、「類別」とそれぞれの「音調型」、および類の「所属語彙」は、関連するが別のものである。「類」の数を変えないままにその「音調型」推定を変えるこ

とも可能である(拙論 1988 はこれを行なったもの)。同じ「類」のままで、その「所属語彙」の変更を行なうこともありうる。ただし、所属語彙のない類は原則的にありえない。もっとも、体系上想定可能ということで○印だけで推定音調型のみを表示し、その具体的な所属語彙は今後の研究の進展にゆだねる、という暫定的なケースはありうる。

なお、「類の統合」を表わす記号としては、「・」を用いて「II-1・2/3/4・5」のよりに示す。「/」は区別がある意で、この例では、2拍名詞の第1類と第2類、第4類と第5類がそれぞれ合流していることを表わす。2拍名詞を代表として述べていることが自明な場合は、「II-」を省略することもある。

2.3 祖体系推定のポイント

祖体系を推定するに当たっては、その前提として、私は(4)の立場を取る(服部四郎 1951: 60 なども参照)。

(4) 祖体系推定の要件

- (イ) その祖形から、現在までに知られている全ての方言(『名義抄』方言を含む)の実在形(文献資料の場合はこれも解釈を経た推定形)への変化が無理なく説明できること。
- (ロ) 推定した音調型が実在可能なものであり、各々の型の間には明瞭な区別があること。それと同時に、諸方言でよく合流を起している型同士の間には、共通点もあること。
- (ハ) 祖形が全体としても一つの体系をなしていること。

若干の補足をしておく。(イ)のポイントは、絶対年代の最も古い文献資料を自動的に出発点とするのではなく、それを一つの「方言」として相対化している点である。絶対年代の古いものがそのまますべて言語的に古いものとは限らない。それよりも時代的に新しい方言の方が、祖体系にあった古い特徴を保っているケースもありうる。そこに比較研究の意義と面白さがある。比較方法は、最古の文献をも超えた古い言語の姿を推定し、それからの(文献を含む)諸方言への変化の過程を描き出すことによって、文献だけでは分からない言語の歴史を明ら

かにすることができるのである。絶対年代の古いものが自動的にそのまま祖体系となるならば、最古の文献資料の研究で出発点が与えられることになり、あとは残る文献や現代諸方言のデータをその後の変化の枠組みの中に位置付けるだけの、知的興味の少ない作業になってしまうであろう。

(ロ)は、推定した型が音声的に発音可能なものであり、また、相互にはっきり区別されると同時に、後の時代に他と合流することをも説明できるものでなければならないことを意味する。

(ハ)の体系に関して、研究者の中には、対応系列をそのまま全部集めればそれでよく、それが体系をなすかどうか意味を置かない人もいるが、私は現実の諸方言の調査体験からアクセントは体系的な存在であり、体系の発想がないと研究ができないと確信しているので、これを重視する。これは、本稿の後半で他の説を批判する際の論拠ともなる。

3. 通説とその問題点

3.1 通説 = 金田一春彦説

本土方言の祖体系に関しては、これまで諸説が出されている。その主なものは、金田一春彦(1974: 82-83)で簡潔に見ることができる。その後のものとしては、琉球方言をも加えた日本祖語の2音節名詞のアクセントを扱った服部四郎(1979)がある²⁾。

その中で、本土方言の祖体系として最もまとまっており、最も多く言及されているのは金田一春彦(1975 他)である。以下、それを「通説」として検討の対象に据える。(5)を参照。名詞欄の点線より上は高く始まるグループ(高起群)、それより下は低く始まるグループ(低起群)である(後出の(16)ならびに5.1節も参照)。

2) 旧稿(1988: 68)に服部四郎の祖形説の変遷を取り上げた際に、「1979年8月号」としたのはミス。「1979年8巻12月号」であった。

なお、本稿で取り上げる説とは大きく異なるアプローチをしたものとして、添田建治郎(1996)の第2章「日本語のアクセントを遡る」、第3章「日本語のアクセントの成立」、および佐藤栄作(2006)などがある。ここではこれらには触れない。

(5) 金田一春彦による祖体系

名詞			動詞		
I	II	III	終止	連体	
-1 *カ(蚊)	-1 *カゼ	-1 *サカナ	I・II	-1 *着ル	*キル
-2 *ハ(葉)	-2 *オト	-2 *アズキ		-2 *ミル	*ミル
-3 *キ(木)	-3 *ヤマ	-3 *チカラ	II	-1 *置ク	*オク
	-4 *ソラ	-4 *アタマ		-2 *書ク	*カク
	-5 *ア[メ](雨)	-5 *イノ[チ]	II・III	-1 *アグ	*アグル(上)
		-6 *ウ[サギ]		-2 *サグ	*サグル(下)
		-7 *カ[ブト]	III	-1 *アタル	*アタル
				-2 *ウゴク	*ウゴク
				-3 *ア[ル]ク	*ア[ル]ク

※ローマ数字は拍数. I・II は連用形が1拍, 終止形が2拍の意(非4段), II は両形ともに2拍(4段). この終止形は現代諸方言の終止形に連続せず, 今日の終止・連体形は古い連体形に遡る.

3.2 通説では説明に困る方言

(5) は, 型相互の区別も明瞭で, 全体も体系的になっている. 動詞の終止形が有核, 連体形が無核というのも合理的である. つまり, (4) の(ロ)(ハ)の基準は満たしている. しかしながら, この立場では, (イ) その祖体系からの派生の説明に困る方言が少なくない. たとえば以下の例である.

- (a) 第1類が有核型の方言が少なからずあり, その多くは第2拍に核(に相当する下降)をもつ. 大きく(イ)~(ハ)の3ヶ所に分布する. この核(下降)の由来を説明することが通説では難しい.

(イ) 佐渡諸方言, 金沢市と周辺の方言, 福井県^{みくに}三国町, 同^{いまじょう}今庄町方言——下降式を持つ石川県^{はくせん}白山市^{しらみね}白峰方言(4.3節)に近接している方言.

(ロ) 瀬戸内海^{まなべ}の真鍋島・志志島^{しし}等の真鍋式方言(II-1・5), 愛媛県^{うおしま}魚島方言, 徳島県^{やましるだに}山城谷, 池田町^{であい}出合方言等——讃岐式(II-1・3)の下降式方言に近接している地域の方言(カッコ内は2拍名詞の類の統合を第1類を中心に示す).

- (ハ) 隠岐島方言, 山口県見島^{みしま}方言, 福岡県筑前, 壱岐, 対馬諸方言, 西南九州二型アの A 型.
- (b) 祖形では同型でありながら, **第 1 類名詞と第 1 類動詞が音調型を異にする方言**の存在がある. これを文法の違いだけで説明することは出来ない. 文法機能の差を音声環境上の差に還元して説明する必要があるが, それができるか.
- (イ) **名詞は無核型, 動詞は有核型の方言**: 富山県諸方言等; 香川県三野^{みの}町, 丸亀市方言等.
- (6) 氷見市^{ひみ}方言 カ[ぜ, カ[ゼガ≠[オ]ク, サ[カナ≠ア[タ]ル
丸亀市方言 [カ!ぜ, [カゼ!ガ≠[オ]ク, [サカ!ナ≠[ア]タル
- (ロ) 名詞も動詞も有核でありながら, **核の位置が異なる方言**: 佐渡方言, 見島方言; 博多方言, 壱岐方言等.
- (7) 見島本村^{ほんむら}西方言 カ[ぜ]≠[オ]ク, サ[カナ]≠ア[タ]ル
- (c) とともに旧連体形に由来するにもかかわらず, **動詞の終止形と連体形でアクセントが異なる方言**. なぜ同じ型から別の型が分裂して生じているのか, その説明が難しい.
佐渡相川町方言, 氷見市方言, 三野町方言等.
- (8) 佐渡相川町岩谷口方言の動詞の音調型

類	現在・止	現在・体	否定・止	否定・体	過去・止	過去・体
1	[着]ル	キ[ルト]キ	[キ]ン	[キント]キ	[キ]タ	[キ]タト]キ
2	ミ[ル	ミ[ルト]キ	[ミ]ン	[ミント]キ	[ミ]タ	[ミ]タト]キ
1	[置]ク	オ[クト]キ	オ[カン	オ[カント]キ	[オ]イタ	[オ]イタト]キ
2	書[ク	カ[クト]キ	[カ]カン	[カ]カント]キ	[カイ]タ	[カイ]タト]キ
3	[居]ル	オ[ルト]キ	[オ]ラン	[オ]ラント]キ	[オッ]タ	[オッ]タト]キ
1	ア[ゲ]ル	ア[ゲルト]キ	ア[ゲ]ン	ア[ゲント]キ	[ア]ゲタ	[ア]ゲタト]キ
2	[サ]ゲル	[サ]ゲルト]キ	[サ]ゲン	[サ]ゲント]キ	サ[ゲ]タ	サ[ゲ]タト]キ

第1類の/着]ル, 泣]ク, アゲ]ル/ (と第3類の/居]ル/) の現在終止形の次末核 (-②型) は, 連体形では/キルト]キ/などと無核化して両形が異なる. 否定形でも/キ]ン, キント]キ/で, 同じことが言える. 佐渡を含む現代諸方言のほとんどはかつての連体形が今の終止・連体形になっているので, なぜ(8)の終止形と連体形でアクセントが異なるかは, しかるべき説明が必要である. しかも, 一方で, 過去形/キ]タ, ミ]タ/は連体形でも核は次末核も含めて消えず(/キ]タト]キ, ミ]タト]キ/), 終止形と連体形が同型である. これは一体何故であろうか.

3.3 通説での解釈

(a) 第1類が核を持つ方言の由来は, (9)のプロセスによるとするのが金田一春彦説の常である. 3拍を例に示す. その途中を…> *○○○> *[○]○○> ○[○]○等とする場合もあるが, 「低平型を経る」という点は(9)と共通である.

(9) *[○○○> *○[○○> *○○[○> *○○○> *[○○]○> ○[○]○

しかしながら, この説には次の(10)の3つの難点があると考えられる.

(10) 変化のプロセスの難点

- (i) 他の類はほとんど動かず, 第1類だけが大幅移動をしたことになる不自然さがある. もちろん, 類によって移動の歩みに差があり, それによって方言差が生ずるのであるが, 第1類だけ的大幅移動はあまりに特異である.
- (ii) そもそも, ある類だけ的大幅移動が他の類との合流を起こさずに可能なのか, という疑問がある.
- (iii) その中間段階, 特に「低平型」(ないし低平調)が, その周辺方言に全く報告されていないのも不自然である. すべての変化過程が地理的に反映されるという保証はないが, それにしても皆無というのは, やはりその説に疑問を抱かせる.

具体的に白峰方言の例を考えてみると, (10)の(i)(ii)に関連させて言えば, 実は, 合流を起こさないようにするために(11)のような大循環を想定しなければならぬはずである. (11b)から(11c)へ移る段階で, 1類がカ[ぜに変化する

る前に4類と5類は○[○とは違う形に変わっていなければならない。それらが変化していなければ1類が追い付いて合流し、その後は同じ形になっているはずである。現在それらが同じになっていないということは、(i)のように第1類だけが変化をしたのではないことを物語る。

また、2・3類は、祖体系のまま変化していない古形保存で伝統保守性の表われとされるが(金田一 1975: 170), (11)のような変化を遂げたとすれば、実は古形ではなく、一周して元に戻るという大変化を遂げたことになる。4類もまた一周しているし、5類もそれに近い変化を遂げたことになってしまう。結局、金田一の主張とは反対に、大循環を想定せざるを得なくなるのである。

(11) 石川県白峰方言(金田一 1977: 163-164 に基づき、合流なしで考えられる案。*は略)

	a	b	c	d	e	f	g
II-1	[カゼ	=[カゼ	>カ[ゼ	>カゼ	>[カ]ゼ	>カ[ゼ]	=カ[ゼ]
II-2・3	[オ]ト	=[オ]ト	=[オ]ト	=[オ]ト	>オ[ト]	>オト	>[オ]ト(古形保存?)
II-4	カ[サ	=カ[サ	>カサ	>[カ]サ	=[カ]サ	>カ[サ	=カ[サ
II-5	ア[メ]]	>ア[メ	>アメ	>[ア]メ	=[ア]メ	>ア[メ	=ア[メ

ことは白峰方言だけに限らない。真鍋式方言や、佐渡、魚島、見島方言等でも同様の問題がある。結局、「第1類が高平型を出発点とし、低平型を介して有核化するというプロセス」の妥当性の問題、突き詰めれば、第1類の推定祖形の問題なのである。

(b) 同じ祖形の第1類が名詞と動詞でなぜアクセントが異なるのか? —— これに関しては、音変化で説明できず、種々の類推変化を持ち込まざるを得なくなっているが、アドホックで不成功に終わっている。たとえば、金田一春彦(1975: 171-175, 186-189 等)を参照。

(c) 動詞の終止形と連体形でアクセントが異なる例は通説の段階では知られていなかった。

3.4 既出の代案

前節の問題点のうち (a) (b) はすでに気付かれていて、それに対する代案も出されている。

たとえば、自らの説にあまりうまく行っていない部分があることを認めた金田一春彦 (1975 他) の代案は次の (12) である。しかし、その部分はこれですぐ説明できるようになっても、今までうまく行っていたところをかえって説明に困る部分が出て来るため、この代案についても「こう推定するためには、他にいろいろ考慮すべき点を残すので、簡単には考えがたい」(1975: 175) と自ら注記するにとどまり、採用に至っていない。

- (12) II-1 * $[\text{○○}]$ に代えて * $[\text{○○}]$
 III-1 * $[\text{○○○}]$ に代えて * $[\text{○○○}]$ または * $[\text{○○}]$ ○

もう一つは徳川宗賢 (1974) の案である。これも (12) に似るが、2 拍語のみの例しか出されていない。3 拍語が明示されていない以上、この説がどのように展開するかは不明である。

- (13) II-1 * $[\text{○○}]$ △ (△は助詞)

両説とも、祖体系全体の大幅組み替えとなるはずであるが、それがどのような体系か分からないのが最大の問題点である。具体的には、たとえば無核型に相当する型がないことになりそうであるが、他の型がどうなっているか分からず、それも不明である。したがって、総体としてそれから実在形への変化も、どのように展開するのか曖昧なままである。

4. 下降式

ここで、私の祖体系案にとって鍵となる、下降式音調をもつ方言の例をいくつか簡単に紹介する³⁾。詳しいことは各方言を扱った一連の拙論を参照のこと。

3) 拙論 (1988) の後に報告されている下降式音調を持つ方言としては、次のものがある。連続する地域はまとめて示した。逐一論文名を上げることは省略するが、上野善道、佐藤栄作、中井幸比古、新田哲夫、松森晶子 (五十音順) による。他に、(松山市と香川県県境地域以外の) 愛媛県の情報は、秋山英治、清水誠治両氏より提供を受けた。謝意

4.1 香川県観音寺市伊吹島方言^{かんおんじ}

伊吹島方言は、それまでの祖体系に推定されていた2拍語の5つの類を、すべて区別していることが昭和40年になって発見された方言で、5類の別を保っている現存唯一の方言でもある。この方言のアクセントは、次頁の(14)に示すように、文節に被さる3つの「式音調」と下げ核//をもつ体系である。その3つの式音調を次のように名付け、表記する(拙論1985)：

「平進式」(普通高く始まり平らに進む。ここでは//で表わす——従来の高起式)、

「下降式」([○○!○○…=「高高中中…」のパターン。ここでは//で表わす⁴⁾)、

「上昇式」(低く始まり上昇する。ここでは//で表わす——従来の低起式)。

それぞれの式音調に核の有無と位置の対立がある。このうち、下降式音調の実例のみを(15)に示す。半下降(!)が必ず現れ、原則として2拍目の後に起こるが、2拍単位では1拍目の後、1拍語ではその途中に現れる。(この半下降は、「中」と簡略表記したものの、5段階表記で示すとすれば3よりもむしろ4である。全体の調音も異なるのでわずかな下降幅でも容易に聞き取れるが、慣れない人は下降のない平調に聞く傾向が強い。)

残る2つの式音調は、関西諸方言によく見られるものと同じである。なお、「小豆」は伊吹島では//アズ]キ/ゆえ、同じ2類語の「娘」に代えて示す。

を表す。

愛媛県松山市～東温市^{とうおん}(旧川内町など)～西条市～新居浜市(今治市近辺を除く?)～川之江市;香川県観音寺市～丸亀市、高松市;徳島県池田町～脇町;石川県門前町、津幡町(以上は「式音調」として存在。この後は、音調実質としてこのタイプが現れる例);愛媛県宇和島市下波地区^{したば}、津島町北灘^{きたなだ};鹿児島県枕崎市など。

- 4) ここでは//を下降式の音韻記号として使い、語頭に置いている。それに対して、[○○!○○などの語中の!は、音声レベルのもので半下降を表わす。

(14) 伊吹島方言のアクセント体系

/蚊	「カゼ	「サカナ	「ニワトリ	「ヒヤケドメ
「葉]	「オト	「チ]カラ	「ア]サガオ	「イ]チョーヤク
		「ムス]メ	「アマ]ザケ	「アカ]ハダカ
			「カネモ]チ	「アガリ]グチ
				「カワクダ]リ/
/紗	!ヤマ	!アタマ	!アシアト	!アタマカズ
			!ミツバ]チ	!サドガ]シマ
				!ワカメジ]ル/
/木]フネ]ウサギ]アトアシ]キビバタケ
]ナベ]]カブ]ト]キノ]ボリ]オツ]キサン
]ノロマ]]マツタ]ケ]カシワ]モチ
]イロジロ]]モメンバ]リ/

(15) 下降式音調型の例

[沙!! [沙!ガ [ヤ!マ [ヤマ!ガ [アタ!マ [アタ!マガ [アシ!アト [アタ!マカズ
[ワカ!メジ]ル

また、伊吹島方言と、金田一の類と、名義抄の声点資料との対応関係を(16)に記す。伊吹島方言の下降式は、名義抄の平平-型に対応していることが分かる。「東声」は下降調であったと推定されている。右端の「高起群」と「低起群」は、出だしの音調がそれぞれ高く始まるか低く始まるかで分類したものである。これは、後に複合語や派生語に関係してくるもので、祖体系推定に際しても重要になる(5.1節も参照)。

(16) 伊吹島方言の式と金田一の類と名義抄声点の対応

伊吹の式	金田一の類	『名義抄』声点	
平進式	I-1,2 II-1,2 III-1,2,3	上(-), 東	高起群
下降式	II-3, III-4,5	平平(-)	低起群
上昇式	I-3 II-4,5 III-6,7	平上(-), 平東	

4.2 香川県観音寺市方言

観音寺市方言（伊吹島を除く内陸部）は、(17)に示すように、下降式 (!) と低接式 (&) の2式音調をもつ。前者は[カ!ゼ, [カゼ!ガ型である。後者はウ[サギ型が主で、他に %ウサギ~[ウサギ等の低くない平ら音調もしばしば出る。ただし、コノ等には語頭のウが必ず低く付く（低接）という特徴をもつ。下降式との対比で、低接式の低起性が句頭で弁別性を失ったのが単独の音調型である。しかし、句中ではこの変化が起こらなかった。前の文節に低く付く「低接性」は、元の低起性の名残と判断される。

(17) 観音寺市方言のアクセント体系（讃岐式：II-1・3/2/4/5）

!/蚊	!カゼ	!サカナ	!カミナリ
!葉]	!オ]ト	!ケ]ヌキ	!ア]サガオ
			!カネモ]チ/
/&木	&フネ	&ウサギ	&ニワトリ
	&ナベ]	&カブ]ト	&ムラ]サキ
			&ノコギ]リ/

4.3 石川県白山市白峰方言

下降式音調は、四国の他に、北陸にもある。白峰方言は、(18)のように下降式 (!) と平進式（あるいはむしろ非下降式⁵⁾、□) の2式と下げ核をもつ体系である。両式とも句頭の1拍目は、それが母音性重音節の一部でない限り、音声的に低めに実現する。

5) 白峰方言に限らず、観音寺方言でも同様であるが、2式の対立の音韻論的な位置付けについては、ここでは立ち入らない。どちらかが有標で、もう一方が「非~式」と捉えられる可能性がある。

(18) 白峰方言のアクセント体系

/蚊一	!カゼ	!サカナ	!アサガオ	!アイダガラ	!ヨメイリサキ
				!ハキノ]ージ	!ネリハ]ミガキ
				!オトコオ]ヤ	!ウワサバ]ナシ
					!カナキリゴ]エ/
/手一	[カタ	[ウサギ	[ハリガネ	[オトシダマ	[カカワリアイ
[日]一	[ハ]ナ	[ム]スメ	[ネ]ーサン	[シ]アサッテ	[ウ]ジガミサマ
		[オト]ナ	[クチ]ビル	[カタ]グルマ	[ミズ]ショーバイ
			[ムラサ]キ	[ウミボ]ーズ	[アクテ]ンコー
				[ウンテン]シ	[ヤサイバ]タケ
					[ワラブキヤ]ネ/

5. 祖体系私案 (1988)

5.1 下降式祖形案

3節の問題点を解決するために出したのが、高起群全体に共通に被さる式音調として「高平調」(平進式)を想定する従来の説に代えて「高高中中…」の「下降式」を立てる案である。しばしば誤解されがちであるが、単に「第1類の音調型」を修正したものではない。それに限らず、「高起群全体の式音調」を下降式に変更したものである。それが3拍語までの範囲では、事実上第1類の修正になっているにすぎない。なお、この段階では「類」は既存のまま手で付けていない。

下降式も高く始まるという意味での広義の高起式の一つなので、「同源語間における高起/低起の式保存法則」(金田一法則)など、従来認められて来た蓄積の部分に対しては何ら影響がない。この式保存法則とは、同源語、すなわち複合語とその前部要素、派生語とその元の形、同一語の活用形相互の間は、(さらに、共時的な繋がりが認められなくなっている同語源語同士の間でも、)高起同士、または低起同士で一貫するというもので、簡単に言うと、「始まりの高さが同じ」という規則である。(4)と(19)の点線に注目。(4)はもとより、それに代わる(19)でも、高起/低起の区分けは一致しており、式保存法則に何らの影響も与

えないことに注意されたい。式保存法則をはじめとするそれまでの成果は活かし、問題点だけを修正することを意図して立てたのが(19)である。動詞の終止形と連体形は、同じ式でそれぞれ有核と無核の関係にある。

(19) 祖体系音調型私案 (既存の類に基づく)

名 詞

I-1	*[カ!!(蚊)]	II-1	*[カ!ゼ]	III-1	*[サカ!ナ]
-2	*[ハ]](葉)	-2	*[オ]ト	-2	*[アズ]キ(～*[ア!ズ]キ)
-3	*キ(木)	-3	*ヤマ	-3	*[チ]カラ
		-4	*ソ[ラ]	-4	*アタマ
		-5	*ア[メ]](雨)	-5	*イノ[チ]
				-6	*ウ[サギ]
				-7	*カ[ブ]ト

動 詞

	終止(有核)	連体(無核)		終止(有核)	連体(無核)
I・II-1	*[着]ル	*[キ!ル(下降式)]	II・III-1	*[ア]グ	*[アグ!ル(*[アゲ!ル)]
I・II-2	*ミ[ル]]	*ミ[ル(低進式)]	II・III-2	*サ[グ]]	*サグ[ル(*[サゲ[ル)]
II-1	*[置]ク	*[オ!ク(下降式)]	III-1	*[アタ]ル	*[アタ!ル]
II-2	*書[ク]]	*カ[ク(低進式)]	III-2	*ウゴ[ク]]	*ウゴ[ク]
			III-3	*ア[ル]ク	*ア[ル]ク

5.2 祖体系からの変化

第1類の核は、(20)のように下降式音調の「高」から「中」への下降が発達して出来たものと私は考える。諸方言の核(j)の位置に2型が多いのは「高高中」の半下降(!)の位置に対応するものである。一部の方言に1型や3型も見られるが、これらはこの2型からさらに変化したものと見る。

(20) *[○○!○ > [○○]○

3.3節で問題にした低平型(iii)を経ず、第1類だけの大移動(i)も考えないので、他との合流(ii)も問題にならない。白峰方言(11)の2拍語の変化は、

事実上 II-5 の *ア[メ]] > ア[メだけという極めて簡単なもので説明できるのである。

次に、佐渡の動詞終止形と連体形の違い (8) は、第 1 類動詞の現在形・否定形が終止・連体共に下降式無核型に由来し、文末に現れる「言い切り」(「」で表示) か、まだ後に続く「接続」(「…」で表示) かの環境の差で 2 つに分岐したものと考える。(21) のように、終止形においては文末下降音調と有核終助詞が関与して半下降が通常の下降になり、二次的に核が発達した。それに対して連体形は、そのような下降を引き起こす環境になかったためにその変化が起らず、その後、下降式が平進化して現在の形になった。元は同じ下降式無核型が環境に応じて別の姿を取ったのである。(つまり、連体形で核が消えるというのは、通時的には逆で、終止形の方に新たに核が発生したものである。) このように考えないと、なぜ両形の違いが生じたのかが説明できないであろう。下降式の半下降が有核助詞を伴うとその下降の度合いが大きくなる例は観音寺方言や白峰方言に見られる (拙論 1988: 39, 43)。

(21) 佐渡岩谷口方言の動詞アクセントの成立 (*[着!ン]は*[着!ル]と同じ変化)

終止 *[着!ル. > *[着]ル. = *[着]ル. = [着]ル.

連体 *[着!ル… = *[着]ル… > *[着ル… > 着[ル…

終止 *[アゲ!ル. > *[アゲ]ル. = *[アゲ]ル. = ア[ゲ]ル.

連体 *[アゲ!ル… = *[アゲ]ル… > *[アゲル… > ア[ゲル…

連体形でも消えない過去形 [キ]タの核は元来の核で、下降式無核型由来の二次的に発生した核とは別である。元からある核は、連体形においても消えないのである。

私案は、上に述べた *下降式無核型 > 有核型の変化と並んで、もう一つ、(22) *下降式 > 平進式がその逆の (23) よりも起こりやすい自然な変化であるとする音声学的根拠にその裏付けを求めている。順行同化である。京都をはじめとする多くの方言で第 1 類が「平進式無核型」で出るのは、(22) の一つである、*[○○! ○ > [○○○の変化によると見る。

(22)			(23)		
下降式	>	平進式	平進式	>	下降式
*[○○!○○	>	[○○○○	*[○○○○	>	[○○!○○
*[○○!○○]○	>	[○○○○]○	*[○○○○]○	>	[○○!○○]○
*[○○!○]○○	>	[○○○]○○	*[○○○]○○	>	[○○!○]○○

6. 拙論（1988）に対する主な批判とその後の展開

拙案 *[○○!○と (12) 金田一春彦の *[○○○]] または *[○○]○, あるいは徳川宗賢の (13) とは全く異なるものであるにもかかわらず, これを同一と見る誤解は多い. 口頭発表後のものは拙論 (1988) でもいくつか言及したが, 拙論後に出た誤解の例としては, 奥村三雄がある.

6.1 奥村三雄

奥村 (1990: 194–195) は, 「前記諸方言【見島, 北陸, 佐渡, 小豆島など】における 1 類の [○○]△型や○[○]△型を説明する為, 《名義抄当時の [○○○]型は, それ以前の中央語で [○○]○型或いは [○○○]]・[○○!○の如き型だったと見る》立場」として, 金田一春彦案, 徳川宗賢案, そして拙案を一緒に掲げて紹介している. しかし, 「私はこの考え方を採らない」としてその直後に批判をしているのは,

「「庭ガ」の類を [○○]○型や [○○○]] 出自と見る立場」と

「名義抄当時の [○○○]型が [○○]○型 (或いはそれに準ずる型) 出自だったとする立場」

だけであり, 後者では「名義抄の [○○○]型 (形など) と [○○]○ (小豆など) との関係が説明しがたい」とする (引用に際し, 原文に括弧付きで挿入されている注記の一部は, 読みやすさのために適宜省略).

以上の記述から, 前者はもとより, 後者の「或いはそれに準ずる型」からも拙案 [○○!○が見事に抜け落ちていることが明らかである. 奥村としては, 無視したつもりはなく, 大同小異の説を一緒にまとめて扱っただけのことに違いない. ここにも下降式に対する典型的な誤解の例が見られる. 後者の 3 拍名詞は, 拙案

では[○○!○型と[○○]○型(ないし[○!○]○型)で容易に区別がつくことは言うまでもない。

前者の2拍名詞第1類+一般助詞については、新提案の立場だと「[ガ・ニ・ヲ・ハ]等の助詞(古今を通じて[○型だったはず)が、もともと【[○○]○型や[○○○]型を推定するところから】○型或いは[○]型出自だった事になり、○出自と見られる「カ(係助詞)・ツ(同)・ト(引用)」や、[○]型出自と見られる「モ」等との関係が説明できなくなる」と奥村は述べる(引用に際し、注記の一部を略)。

これも結局は金田一と徳川に向けられた批判で、私には当てはまらない。付属語のアクセントには旧稿も本稿は立ち入らないが、そしてそれゆえ[○○!○として敢えて[○○!△(△は付属語の印)とはしていないのであるが、古くは付属語も独立のアクセント単位を形成していて、かつこれらの付属語はそれぞれ違うアクセントをもっていたと考えている。1拍の付属語の無標の型[○!!が自立語に付いた場合にどれくらいその特徴を実現させていたかはなお考えるべきであるが、2拍のカラなどは、単独の引用形で[カ!ラであるだけでなく、[カ!ゼカ!ラのように付属語としても半下降をもっていたものとする。

話を元に戻すが、それにしても、なぜこのような誤解が相次いだのであろうか。拙案のわずかな下がりやを音声レベルの現象と捉えてしまうこと、「式」全体のことではなく一つの「型」だけの問題と見てしまうことが絡んでいそうである。しかし、より大きな理由は、下降式音調を聞いたことがない(ないし、聞き取れない)⁶⁾ ために私の主張が信じられない(ないし、理解できない)ことによるのであろう。そしてまた、その音調型がしばしばHHMとも表わされるので、あたかも調素のように捉えて、それならばH(●, 高)とL(○, 低)以外にはF(■, 通常●, 降)とR(□, 通常○, 昇)しかありえず、M(中)が日本語に存在するとは考えられない、という思い込みから拒絶する人もあるようである。しかし、もとより、私はM声調などを主張しているのでは全くなく、あくまでも式

6) 20年前はこの下降式音調の聞き取りができる人はほんの一握りしかいなかったが、近年になって、その録音音声などが学会発表などで流される機会も増え、聞き取りの出来る研究者が増えてきているのは幸いである。また、音響分析による研究も進みつつある。

音調のパターンを記述する際の音調簡略表記に用いているに過ぎない（後出の6.4節も参照）。

なお、奥村は、以上の見解によって代案を否定し、 $[\bigcirc\bigcirc\Delta > [\bigcirc\bigcirc]\Delta]$ の変化を想定して論を展開しているが、これについては6.3節の添田建治郎のところで触れる。

6.2 山口幸洋

山口幸洋は単独（2002）あるいは名倉仁美との連名（2001a, b）等でたびたび批判を展開している。その批判は多岐にわたっており、しかもその論が錯綜していてその意図を正確に把握するのは容易なことではない。また、言語史研究における比較言語学の考え方そのものを否定し、言語地理学に基づいて研究すべきと考えているようである⁷⁾が、その一方で、途中では明らかに比較方法に基づいて論を進めているなど、内部矛盾と思われる箇所も少なくない。その点で議論が噛み合わない部分も出そうであるが、できるだけその意図を汲み取りながら本稿にとって重要な2点のみを取り上げ、私の見解を述べることにする。その性質上、直接引用でなく、適宜私の言葉で要約して示す。

6.2.1 伊吹島は中世まで無人島だったという説

山口は、まず、(24)のような歴史的根拠をあげて伊吹島方言の古さを否定する。

- (24) 伊吹島に人が住んだのは古文書によると1500年以降である。ゆえに伊吹島方言が「祖語」でありうるはずがない。伊吹島方言が古いと見る人の見解は間違っている。

しかしながら、私は、伊吹島方言が祖語⁸⁾だとも、ましてやその祖語が伊吹

7) そのために、山口幸洋の批判は、拙論というよりもむしろ金田一春彦に代表されるアクセント史の捉え方に向けられている。たまたま伊吹島方言に関しては拙論も対象となったものと見る。

8) ちなみに、私は「祖語」と「祖体系」を区別している。祖体系は、一つの分野（ここではアクセント）について言い、祖語は、それらを含む言語全体をさすために取っている。祖語に言及するためには、他分野での祖体系を構築するとともに、それらを共時態

島に話されていたとも一度も主張していないのである。伊吹島方言は、祖語（祖体系）に立てられる「類」の区別をほとんどそのまま保持している点では「古い」とするが、その中で「音調型」の大転換が起こったものと見ているのである。型の区別はかなり古い特徴を保つが、型の姿（音調型）は完全に「新しい」としている以上、伊吹島方言が祖体系そのものであると主張しているはずがない。

私は古文書に基づくという山口の説を直接肯定も否定もできないので、仮にそれが正しいと仮定して話を進めるが、たとえば京都方言で一部の類の統合が起こった時代の後に伊吹島に人が住むようになったとしても、その当時、元の類の区別を保っている方言が伊吹島周辺にあり、その話し手が無人島（伊吹島）に移り住んだのであればそれで良い。そのようにして伊吹島方言が成立したとしても、伊吹島方言の古さにとって何の問題もないのである。比較方法は、あくまでも「その言語」の元をたどるもので、「その地域」の過去を探るものではない。今の伊吹島方言の、言葉そのものの歴史を解明することが目的であって、それを遡って行くと伊吹島以外の地域で話されていたという可能性はいつでもある。それを伊吹島という地域の歴史だと誤解するところから話は混乱するのである。私は伊吹という島で太古から言葉が使われていたなどと主張しているのではない。使われていても、使われていなくても、どちらでも構わないのである。山口幸洋に限らず、言語と地域とを混同している比較言語学を論じているつもりの方は少なくない（拙論 1996: 33-34 も参照）。

6.2.2 異なる体系の接触で類の区別が生まれるか

山口幸洋のもう一つの特徴的な主張は、「地理的な接触によって類の区別が増える（あるいは、生まれる）」とする考えである。(25) がそれで、伊吹島方言などの2拍名詞の5類がすべて区別されている1/2/3/4/5の類別体系が古いのではなく、接触の結果あとから生じたものに過ぎないとするのである。すなわち、次の考え方である。

化する手続きが必要になる。本稿で論ずるのは、この意味での祖体系である。ただ、文脈によっては「祖体系が体系的である」のように変になることもあり、また特に他者の説の紹介に際しては、必ずしもこのように使い分けがなされているとは限らない。

(25) 周辺に $1/2 \cdot 3/4/5$, $1 \cdot 3/2/4/5$ 等の諸タイプがあり, その接触で $1/2/3/4/5$ が生まれた.

しかしながら, 私の知るかぎり, 接触によって新しい対立が生まれた例は皆無である. 具体的な例で言えば, 外輪式 $1 \cdot 2/3/4 \cdot 5$ と中輪式 $1/2 \cdot 3/4 \cdot 5$ の接触は諸処で起こっているが, それにより $1/2/3/4 \cdot 5$ が生まれた例は知らない. 観察されるのは, 優位方言である中輪式の影響を受けて外輪式の第2類が分裂的移行を示す過渡期的姿のみである. 他のケースでも, 優位方言に同化される途中の過程が観察されるのみである. 山口の論が成り立つためには, 接触によって新たに「類の対立」が増えた確実な例を示す必要がある. それなしにいくら主張をしても意味をもたない.

また, $1 \cdot 2/3/4 \cdot 5$ や $1/2 \cdot 3/4 \cdot 5$ を所与のものとして扱っているが, それぞれの類別体系自体がどのようにして生じたのが問題となる. これを順に突き詰めて行くと, そもそも最初の段階で類の区別がどのようにできて来たのかを明らかにしなければならなくなる (アクセント発生論). しかし, それに対する明瞭な見解は見えないようである. あるいはそのような区別をもった言語の話し手が大勢移住して来たとするのかもしれないが, その影響下で現在の諸方言の姿がすべて出来上がったとすれば, もはや比較言語学的にそれが祖体系だとすると変わりがないことになってしまう.

6.3 添田建治郎

第1類が下降(核)をもつ見島, 筑前, 隠岐島, 小豆島の諸方言で, 添田建治郎 (1996) は

(26) * $[\text{OO}\Delta > ([\text{OO!}\Delta) > [\text{OO}]\Delta$

の変化を推定している. この位置付けははっきりしないが, 全体から見て「末拍の低下」と捉えているようである. エネルギーの減少に伴って末尾が低くなる, という変化を想定しているものと見られる. ($[\text{OO!}\Delta$) は, 必ずしも経るとは限らないと見ているようである.

(26) は、 $[\text{○○}△ < *[\text{○○}!△ > [\text{○○}]△]$ という、第3の祖形からそれぞれの方向に変化をしたと見る拙案と対立するが、違いはそれだけではない。出来上がった形においても、2拍語、3拍語までの範囲では両説の下降の位置が一致するが、それ以上長くなると違いが出て来る。拙案の $*[\text{○○}!○○ > [\text{○○}]○○]$ に対して、添田は $*[\text{○○○○} > [\text{○○○○}]○]$ のはずである。長い形を考慮すればするほど、単に末尾の弱化による下降で $*[\text{○○○○○○} > [\text{○○}]○○○○]$ の変化が生ずるとみるわけにはいかない、という私の主張がはっきりするであろう ((23) がその逆の (22) よりも生じにくいとした件も参照)。

もしも (26) の変化が疑いないものであれば拙案への反論となりうるが、私の見るところ、確実な変化とは言えないようである。有意な証拠と言えそうなものを探すと、唯一、小豆島のある集落で80歳台2人、50歳台2人、40歳台1人を調べたところ、II-1・3が $[\text{○○}△]$ が主流の中で、50歳台の2人に $[\text{○○}!△]$ が混じった、という報告が見つかるだけである (添田 1996: 338)。しかし、安定したものではなく「混じる」だけのようであるし、40歳台はまた $[\text{○○}△]$ であるところから、決定的な証拠とは見なしがたい。

なお、6.1節で言及した奥村三雄も、見島、筑前その他の方言において、事実上 (26) と同じ $[\text{○○}△ > [\text{○○}]△]$ の変化を提案しているが、こちらははっきりと「助詞の低下」であると書いている (p. 193)。よって、長い単位においては $[\text{○○○○}△ > [\text{○○○○}]△]$ を考えていて、私の立場とは異なる。しかし、そもそも拙案をきちんと捉えておらず、そこに上げられている変化の説明は説得力をもたない。

ただし、添田、奥村とも、**低平型を経ない成立**と見る点では拙案と共通する。この、低平型を経なかったとする点については、その後多くの人に受け入れられて、もはや疑いの余地はないものと思われる。

6.4 松森晶子

松森晶子は、拙論 (1988) をうけて、その下降式よりも遡った形を本土方言アクセント祖体系に立てている (1993; 1995; 1997)。そして、「本土祖語」(用語は松森に従う) と琉球祖語が分かれる前の「日本祖語」のアクセントまで推定を試

みている。それぞれ (27) と (28) である。本格的な論で、通説の平安末期京都方言アクセントではなく、それよりも遡った形を祖体系に立てるという点では拙論と共通するが、その結論は大きく異なっている。自ずと異論もまた非常に多くあるが、ここではその中から、本稿に直接関係する大きな点だけに絞って言及することにする。個々の方言の派生の歴史に対する私見は省略する。琉球方言についても触れない。なお、(27) (28) のカッコ内は助詞付きの形。

(27) 松森による本土アクセント祖体系（本土祖語，平安末期以前）

I-1	*[O]] ([O]]△)	II-1	*[O]]]O ([O]O△)	III-1	*[O]O]O
-2	*O (O△)	-2	*OO	-2	*[O]OO
-3	*[O ([O△)	-3	*[O]O	-3	*OOO
		-4	*[OO	-4	*OO]O
		-5	*[O]O	-5	*O[OO (後,*O[O]Oに変更)
				-6	*[OOO
				-7	*[OO]O

(28) 松森による日本祖語のアクセント体系（本土祖語と琉球祖語が分かれる前）

I-1	*[[O (O[△]])	II-1	*O[O]] (O[O]△)	III-1	*O[O]O
-2	*[[O (O[△)	-2	*O[O	-2	*OOO
-3	*[O]] ([O]△)	-3	*[OO	-3	*OO]O
		-4	*[O]O	-4	*O[OO
		-5	*[O]]O (<***OO)	-5	*[OOO
				-6	*[OO]O
				-7	*[O]OO

松森の論 (1993) のポイントは、2か所に山がある *HLH を本土祖語に想定し、2つの H の衝突による「ダウンステップ」で後から下降式が生じたとする点である。これに関連して押さえておくべきことは、次の3点である。(i) まず、「下降式はどのようなメカニズムによって生じたのか」がその論の出発点となっていることに注目しなければならない。この姿勢は、仮にダウンステップによるもの

でなかったとしたら、「一体どのようなメカニズムによって生じたのかということについて、今後さらに考察が必要であろう」(p.63)と述べていることから明らかである。(ii) その前提にあるのは、下降式は特殊な、表層の音声現象と見るべきもので、それが祖体系に立つはずがないとする考えである。拙案を音韻レベルでMを立てているものとみる考えがその背後にあるに違いない。曰く、「このことは下降式の記述においては、表面的にはH(高), M(中), L(低)の3段階の音調が必要であるが、音韻的にはHとLの2つの組み合わせで処理することが可能であることも示唆する。そうすれば、レキシコンにM音調を入れておく必要がなくなり、抽象レベルの記述体系がより簡単になるであろう」(p.39)。(iii) それに加えて、パントゥー諸語にもHHMの音調があり、それがHLHからのダウンステップによって生じたとされていることも大きな手掛かりとなったものと認められる。

しかし、この前提は私の考えと大きく異なる。まず(i)であるが、諸方言を歴史的に遡っていったときに収斂する体系こそが祖体系として私の求めているものであり、その考察の結果得られたのが下降式だと主張しているだけで、それが「何に由来するのか、どのようなメカニズムによって生じたのか」はそもそも問題にしていないうし、する必要もない。

(ii) 音韻論的に見た場合でも「式音調」として下降式を立てるだけで、声調言語とは最初から見ない以上、レキシコンにMはもとより、HもLも立てないのが私の立場である。また、上記の引用文の直前にある「下降式とは、本来同一音調句にH音調を2つ持つ音調連鎖から派生した表層の音声現象であると考えれば、抽象(深層)レベルでは、この現象の記述のためにあえて新たな核を設定する必要もないと言える」(p.39)との見解も、最初から下降式を「核」とは別のもの(だからこそ、下降式にも無核型と有核型がありうる)と捉えている私にとっては意味をもたない。なお、(iii)については、私は旧稿段階では考えていなかったが、着想の手掛かりの問題なので、特にコメントすべきことはない。

(i) に戻るが、与えられた資料がすべて合理的に説明できる集束点として立てた祖体系も、もちろん、その段階でいきなり無から生まれたわけではなく、それ以前の歴史があったに違いない。そのことは何ら否定をしないし、松森が述べる

ような変化自体も（その主張するプロセスはともかくとして）ありうることである。現に、現代日本語諸方言で下降式音調が認められる地域の周辺には、確かに二山型音調が見られる傾向がある。

しかし問題は、そのような二山型があくまでも「祖体系」として適切かどうかの一点に絞られる。私の見るところ、その点で(27)にはいろいろ問題がある。その主なものは次の(29)～(33)の5点である。以下、その疑問点を述べ、それに対する松森の見解があれば、それを書き、さらに必要に応じて（それをも受けた）私見の順に記す。

6.4.1 体系の不自然さ

松森晶子の推定(27)を見ると、次の点に気がつく。

(29) 二山型が1系列しかない、*○[○]○がない等、体系としては均整の取れていない不自然なものである。

誤解のないように補っておくと、二山型の存在自体を問題視しているのではない。二山型を有する現代諸方言から判断して、通常は他にも二山型がありそうであるにもかかわらず、(27)は1系列だけで孤立しており、LLL型などがそのまま残っている点が疑問なのである。（それに対して、拙案の下降式は孤立しておらず、高起群のすべてにかかるものである。）4拍語にHLHLやHLHH、さらにはHLLH型があるのかもどうか、3拍語から類推できない。要は、その体系が見えて来ないのである。

さらに言えば、(28)の日本祖語から(27)の本土祖語へは、

(30) *○[○]○ > *[○]○[○]

という、起こりやすい自然な変化が生じたと松森は見ているのであるが、体系内にすでに二山型がある場合を除いて、(30)は中間段階を経ずに容易に生ずる変化だとは私は見えていない。直ちに生じたとするのであれば、「不自然な変化」によって（二山型が1つだけという）「不自然な体系」に変化したということになってしまう。最初から第1類に*○[○]○を立ててあれば少なくとも体系としては

安定したものになるにもかかわらず、それをせずに敢えて*[O]O[O]を立てて不安定なものとするのは、松森にとって「下降式」をそのまま立てるわけにはいかず、別の型（すなわち、*[O]O[O]）から導き出す必要に迫られているからに他ならない。

この、二山型が1系列しかない不自然さと、HLHが不安定な型であることは松森自身が認めていることで、(27)は本土諸方言が派生していく「中間段階」ゆえに「流動的で、かつ不安定な過渡期の体系」なのだとしている(1993:64-65)。そして逆に、(28)の前段階はLとHが「均整の取れた理想的な体系」とする。その理想的な体系が崩壊した要因はII-5類の“異化”にあると述べる。

しかしながら、多様な分岐が必ずしも不安定さを前提とする必要はないと私は考える。すべての祖語は分岐を前提に立てるものであり、それを理由に不安定なものをわざわざ立てなければならないことはない。また、「祖語は理論的な歴史的な分岐点」ならば、まず(19)の下降式拙案では不十分である証拠をあげ、もっと古くまで遡る必要性を論じてから「下降式の由来」を問題にすべきであった。それが明示されないままに、あるいは下降式は表層の音声現象に過ぎないとの想定のもとに、最初から「下降式の由来」が問題になっているのである。

また、「同化」と違って、「異化」が新しい型を生み出しうるかも大きな疑問がある⁹⁾。LLの連続が異化によってFLになったとするのがその説である。LLLがなぜ不変化だったかという問題は氏自身が気付いているので問わないとしても、異化の考えは、LやFを単位として指定する「音節声調」（拍声調）に基づく考えであり、それと(27)の「アクセント体系」とは容易に両立しないはずである。この問題に関する氏の立場は次のようなものである。長くなるが、重要なので、(28)の日本祖語の体系に関して述べている部分から引用する。

9) 松森(1993)は、「2つのH音調が隣接することによって、片方が1段階低くなる現象は、2つのH音調の聴覚的区別のための、一種の異化(dissimilation)の現象である」と考えることが可能である」とも述べている(p.38)。また一方で、語頭低下と語頭隆起がともに「1つの音調句の始まりを、続く音調と反対の音調によってはっきり明示する」という、いわば「境界表示の機能」のために起こる、自然な音調変化と言えるであろう(p.43)として、明示的には述べていないが、語頭低下もまた一種の「異化」と見ているようである。これらを見るに、その「異化」の解釈がかなり広く適用されていることが分かる。

- (31) 日本祖語のアクセントは、ある語（あるいはその語を含む音調句）が全体としてどのようなピッチ曲線を描くかという情報が他の語との弁別に重要な役割を担っていたことが想定される。また、各語のモーラ数が増えていくに従って音調の型の数も増すことから考えて、日本祖語は、単語（あるいはその単語を含む句）を単位として、それ全体に各種の音調の型がかぶさるといったタイプの声調言語であった可能性がある。そして (26) 【=本稿 (27) の 2 拍語 LL を FL に直したもの】 から分かるように、日本祖語は、L と H の 2 つの音調の組み合わせの型のタイプが、均整のとれた理想的な体系を持っていたであろうということが分かるのである (1993: 69)。

しかしながら、(a) 語全体のピッチ曲線の型が重要で、かつ単語の長さに応じて型が増えていく体系が、(b) 声調言語で、(c) それが L と H の 2 つの音調からなっていて均整が取れているという意味を、私はきちんと理解することができない。(a) と (b) (c) はどのように結び付くのであろうか。しかも (31) に引いた冒頭の一文には注が付いていて、それが東京方言のような位置が固定的なピッチアクセントの性質をもっていたのか、鹿児島方言のような位置が固定化していない語声調方言タイプであったのか、その両者の性質を兼ね備えていたのかは現段階では不明である、とある。その主張がよく理解できないのは、(b) の「声調言語」の捉え方が、松森と私で違うためなのかもしれない。

仮に (c) は音節声調ではなく、単語の型を構成するものとするならば、H と L だけからなることにどれほどの意味があるのかそもそも疑問である。私は H や L に音調の簡略表示以上の本質的な意味があるとはまったく考えていないからである。また、仮に H と L だけなら簡潔だとする立場を認めたとしても、LHL 型の不在など、(29) に述べたように均整が取れていない部分があるのである。なお、この点については、のちに松森(1997)で III-5 の LHH をこの LHL に変えている。今度は逆に、HHL がありながら LHH が欠落する形になっている。

6.4.2 式保存法則（金田一法則）

2 番目の問題は、次の点である。

(32) 松森説では、平安末期京都方言における「同源語（派生、複合語、活用）間の高起/低起の式保存」（金田一法則）との「対応」が現代諸方言のあちこちに見られる事実が説明できない。

これに関して松森は、(a) 複合語の前部要素は変化しやすく、語頭隆起や語頭低下で容易に高起低起が入れ替わるので、祖語における音調が前部要素に保存されるのは極めて稀なことである（6.4.4 節を比較）、(b) 金田一法則は、本土祖語(27)ではなくその前の日本祖語(28)から III-4 類だけが変化して出来たと見る、(c) 式保存は自然な変化で、各地で独自に発生しうる、という主張で答えている。

しかし、これもまた、(a) (b) (c) 3つの論理的関係が私には不明である。(a) は式保存への反論に繋がるようにも読めるので、私見を述べておく。松森は前部要素の「音調型の出だしの音調」を問題にしているが、着目すべきはそこではなく、(c) に関係する前部要素の「類の統合」の仕方である。音調型が変化しても式保存が保たれる例はいくらでもある（拙論 1984）。前部要素の音調型が変化しやすいからといって、それが直ちに式保存に影響するとは限らない。

(b) は、自ら立てた(27)「本土祖語」の否定に繋がる発言である。(27)では祖体系として機能していないと自ら認めていることになるからである。

また、(c) の式保存（に対応する規則、すなわちその拡張版を含む。拙論 1984）が観察されるのは、私の知るかぎり、(5) (19) の点線を跨いだ類の統合は起こしていない（ないしは、ごく一部の類だけの合流にとどまっていた、そこだけが例外になっている）方言である。とりわけ共時的な式特徴を持たない方言においてはこの制限が強く、たとえば、II-1/2・3/4・5 の東京方言には式保存の反映は見られない（複合語において基本的に前部要素は無関係で、後部要素で決まる）。それに対して、II-1・2/3/4・5 の岩手県雫石方言では、単独形が無核型の II-1・2（/○○₁/）を前部要素とする複合語は無核型、単独形が有核型の II-3（/○₁/）/4・5（/|○○₁/）を前部要素とする複合語は（3 類、4・5 類を問わず共に）有核型になるという規則が強く働いている（/ニワイジリ₁、カワクダリ₁；ヤマノ[ポリ、ハルヤ[スミ]）。これは、かつての高起群に無核型が、低起群に有核型が対応していることによって生じたものである。

また、2 型アクセントの鹿児島方言における A 型/B 型の式保存に対応する規

則も、II-1・2 (A) /3・4・5 (B) を条件に起こっている。一方、同じくN型アクセント (3型アクセント, 早田輝洋の「語声調」方言) の隠岐島諸方言は、II-1/2・3/4・5 で式保存が成り立たない。松森の言うとおりであれば、このような類の統合の仕方に関係なく各地に容易に発生していてもよいはずであるが、現実にはそうになっていないのである。

この (a) (b) (c) の主張に先立って松森は、従来の研究の問題点として、「式保存法則がどのようなプロセスで、なぜこれらの諸方言に生じたのか」を十分に検討しないまま、これを祖語からの継承として安易に受け入れてきたことを取り上げている。しかし、諸方言にこれに関する対応が明確に認められ、それを祖体系においてすでに存在した特徴と見る解釈に矛盾がない限り、祖体系に立てるだけで十分で、これが「どのようなプロセスで、なぜ」生じたのかまで解明しなければならぬ義務はない。祖形として立てるということは、それが生じた理由とは独立に、それが「所与の出発点」としてあったとすることに等しいのである。そしてその特徴が、諸方言で保存されたとするだけである。それを「失った」方言ではその過程を明らかにする必要があるが、「保存」においては、それを直接問う必要はない。

松森が取り上げるべき課題は、式保存法則が祖体系には存在せず、後の時代に諸方言で独立に生じたものという仮説を立てて、そのみを実証すべきであった。(a) も (b) も関係なく、(c) だけを論拠をもって主張すれば良かったのである。しかしながら、その (c) に対する説明も成功していない。確かに、ことを複合語に限るのであれば、前部要素の出だしの特徴 (始起特徴) が保たれる (複合語全体に及ぶ) という変化は起こりやすいという見通しまでは言えても、前述のように、現実にはそれは限られた条件の下にしか成り立っていないのである。活用形の間では統一の力がそれほど大きく作用するとは予測できないし、さらには、非共時的な同源語においても成立することまでは到底期待できない。それにもかかわらず、現実には「類の統合」の条件を満たすいくつかの方言にはこの規則性が見られるのである。これは、やはり祖体系において存在したとするのが最も合理的な説明だと考える。

関連して言えば、松森案では**動詞の体系**も不自然になってしまう。まず、文の

終止に使われる終止形が無核（着[ル, 見ル]）で、次に続く形の連体形の方が有核（着[ル], [見]ル）となる。さらに、「見る」の終止・連体両形の間には式保存法則も成り立たないことになるのである。敢えてそのようなものを想定する理由を見出すのは困難であろう。むしろ、第3節で見た金田一祖体系の方が合理的である。

6.4.3 高平化

3点目は、高平化の起こりやすさに関してである。

- (33) *[O]O[O] (二山型) の変化の方向として, *[O]O[O]>[OO]!O の「ダウンステップ」(downstep), *[O]O[O]>[O]OO の「一峰化」(single-peaking) と並んで, *[O]O[O]>[OOO] の「高平化」(plateauing) の3つが可能であるとする (p. 40) が, 現実の日本語諸方言を見ると高平化がもっとも多く生じていることになる点。(括弧内の名称は, すべて松森による¹⁰⁾。もっとも, plateauing は Goldsmith の自律分節理論から採用したとある。)

この3つのうち, 最も多くの方言で起こったことになる「高平化」の実例は, 私の知るかぎり日本語では極めて稀で, 高低差の少ない埼玉県蓮田市^{はずだ}方言における HMH>HHH ぐらいである。この変化の可能性を私は日本語でおそらく最初に指摘した(拙論 1977: 296) のではあるが, *[OO]!O>[OOO] よりずっと起こりにくいものと考えている。したがって, 高低の差が非常に明瞭であったと推定されるかつての京都方言をはじめとする多くの方言でこの変化が起こったという説に, 直ちに同意することは出来ない。

6.4.4 複合名詞後部要素の型

4点目は, 複合語後部要素に関する。

10) 「山」と「峰」の差異は未詳。推測するに, HLH の後の -H も, HLHH の -HH も同じく「山」ではあるが, 後者の -HH は「峰」ではないのかもしれない。伝統的には, 「一峰化」は「山の一元化」と呼ばれてきた。また, 「二山型」は「重起伏型, 重起伏調」と呼ばれている。

- (34) 複合名詞後部要素の振る舞いが、京都方言（単独形はII-1/2・3/4/5）と東京方言（II-1/2・3/4・5）で揃ってII-1・2/3/4・5と「類」が分かれ、かつ、[-ウシ・-]イシ/-イヌ=-/-ガ]サ・-ザ]ルと「核の有無と位置」まで一致する事実（和田実1943の発見）が（28）日本祖語における音調型と複合語規則で説明できるとする点。

和田の語例で具体的に補っておくと、京都方言は、

「コーベ]ウシ,」マダラ]ウシ;「ミカゲ]イシ,」ヒウチ]イシ;

「ニホンイヌ=,」アキタイヌ=;

「コーモリガ]サ,」アイアイガ]サ;「ニッポンザ]ル,」テナガザ]ル

であり、式の対立がある点を除けば東京方言と核の有無と位置が一致するのである。

この4点目が、松森（1993）の中で最も刺激的で、興味を引かれた部分であるが、しかし、まず、この現代の両方言の事実は過去の文献京都方言の事実（基本的に-○]○）と合わない。また、松森の主張どおりだとすると、ここでも（27）の存在理由が不明になってしまう。京都方言と東京方言との関係を本土祖語である（27）ではなく、さらに遡った（28）日本祖語ではじめて説明できるとしているからである。

さらに言えば、私見では、京都方言と東京方言は、そのアクセント体系の違いにもかかわらず、複合語規則その他の点で驚くほど近い関係にあり、通説になっている感のある日本語アクセントの2大タイプではない。両方言は、かなり後の段階で分かれた可能性がある。複合語後部要素の問題は、他の方言も考慮に入れて総合的に考察し直す必要がある（拙論1997:249-250も参照）。

6.4.5 語彙拡散理論の立場

松森晶子（1995;1997）では、次の主張をしている。

- (35) 愛媛県川之江市, 香川県伊吹島, 観音寺市, 高瀬町, ^{たくま}詫間町; 香川県志々島, 栗島等; 徳島県池田町, ^{みかも}三加茂町, ^{わかき}脇町でIII-5類が(36)のように二分している事実(多少の地域差あり)を報告する。それをもとに(27)

の III-5 を *○[○]○ に改訂し、これが語頭隆起で *[○]○[○] になる時期の早い **a** 群 (後に >[○○!○])、遅い **b** 群 (後に >[○]○○) でその分岐を説明している。音の変化が、一定の条件を満たすすべての語彙に一時に影響が及ぶのではなく、時間をかけて徐々に進行して行くという「語彙拡散 (lexical diffusion) 理論」の立場である。その時間をかけた変化の途中で、語彙によって分裂も起こりうるとするものである。

- (36) **a** 群: 油, 五つ, 命, 胡瓜, 心, 涙, 箒, 枕, … 多く [○○!○], 島は○[○]○に
b 群: 朝日, 鮑, 哀れ, 鰈, 姿, 錦, 山葵, … 多く [○]○○に

しかしながら、この場合、a/b を分ける音韻条件が見つからない。現実の言語変化を言語地理学的に追っていくと、音韻条件に従った規則的な変化だけでは説明のつかない語彙拡散的な現象が見られることがあるのは確かである。しかし、それをそのまま過去にまで安易に拡張するのは危険だと考える。きちんとした論拠がないままに拡張しては、歯止めがなくなって何でも説明できてしまうことになる。私は、比較方法の原則に従って、音韻分化条件が見つからない以上、2つの異なる祖形を立てるという立場を取る。讃岐式と真鍋式での一致は「共通改新」ではなく「共通保存」と見るべきである。

6.5 上野和昭

上野和昭 (2003: 257) は、拙案を紹介した後に、次のように述べ、「去声」を体系内にどのように位置付けるかを問題にしている。

- (37) 「ただし、古く去声 (上昇調) に始まるとされる諸語 (たとえば、「す(巢)・も(裳)・はぎ(脛)・へみ(蛇)」など) が、この下降式音調を組み込んだ祖体系からどのようにして現れるのかなどの点において、まだ説明してほしいところも残る。」

去声の組み込みは容易にできる。私見はすぐ後の7節の中で述べる。

7. 祖体系の改訂案

6.4.5 節 (35) (36) の方言資料と 6.5 節の文献資料を取り入れ、(19) の「アクセント体系」に着目しつつ、他に立てるべき可能な型がないかを考えてみる。ただし、資料の欠落により、方言からの根拠が少ないものが増える。

7.1 低起群

平安期の資料で去声始まりの単語として、(38) を加える。「よく、まず、もし」は副詞であるが、通常の名詞では日常語が少ないので、代わりに入れた。

(38) 去声語彙

- *[[巢<去>], *[[齒]]<去>; *[[ゴマ<去上> (胡麻), *[[ヘビ<去上> (蛇),
 *[[ユリ<去上> (百合), *[[ハ]ギ<去平> (脛), *[[ヨ]ク<去平> (よく),
 *[[マ]ズ<去平> (まず), *[[モ]シ<去平> (もし);
 *[[ヒスイ<去上上> (翡翠), *[[エ]ヤミ<去平平> (疫)

これらは、旧案 (19) が対象とした「類」にはなかったために入れなかっただけで、体系に組み込む上では何の問題もない。低く始まってすぐに上昇するタイプがそのまま入る。

ただし、去声始まりの単語は、現代方言の情報が欠けているものが多い。ハギは八丈島方言 (アクセントの対立なし) と (本稿で対象としていない) 琉球方言の資料しかなく¹¹⁾、エヤミは、モ<去> (裳) と同じく方言に関して情報を持たない。ヒスイも、同じ声点の「紫苑 (シヲニ, しおん, 植物)」とともに、諸方言のアクセントの詳細は未詳であるし、辞書にアクセントが載っていても伝承形が不明である。ゴマと同じ声点のものにユリ (百合) とヘミ・ヘビ (蛇) があるが、なぜかユリは方言によってはゴマとアクセントが異なる。ヘビは、動物という「意味」が関与して現代では第5類に合流している (「鳩, 蛸, 亀, 熊」も同じ変化を遂げている。拙論 2002: 178)。

11) 私の岩手県雫石方言には /スッ[バケ] (ハは昇り核) という形がある。子供がズボンも穿かないでいる状態をさす言葉で、「素脛」であろう。しかし、単独形の「脛」は使わないため、そのアクセントは分からない。

6.4.5 節で述べた理由により松森案を改訂して III-5 類を a/b に分け、さらに服部四郎 (1951: 21-22) も参考にして III-7 も a/b の 2 つに分ける。それぞれ、

(39) III-5a *イノ[チ, III-5b *アサ[ヒ]], III-7a *カ[プト, III-7b *ク[スリ]]¹²⁾

を立てる。本来は別の類名を与えるべきところであるが、従来のものを生かした便法に従う。次の高起群も同様。

7.2 高起群

文献上よく知られた *[[ミゾ]] (溝) がある。名義抄以前の形かとも思われるが、体系上可能である。現代方言では特殊な用法に残る *[[ウエ]] (上) も可能性があり、3 拍語では *[[トコロ]] (所) がありうる (あるいはさらに *[[アシタ]] (明日) も入るか?)。体系上可能な形を尽くす意味で含める。

しかし、議論の多い *[[ニ]]ジ (*[[ニ]ージ?)(虹), *[[ヒ]]ムカ (*[[ヒ]ームカ?)(日向 = 東) は、音節構造およびアクセント体系の上での位置づけになお詰めるべき問題があり、ひとまず考慮外に置く。

7.3 本土諸方言祖体系改訂案

以上を踏まえた改訂案を (40) に示す。動詞は *[[ミ]タ(ル)(見た)¹³⁾ などの活用形以外は影響がないので、名詞のみを掲げる。その音韻解釈した体系が (41)

12) かつて、拙論 (1987: 64) では、III-7b *[[クスリ]] を立て、さらに III-6 も二分してその b として *[[○○○]] が立てられる可能性を指摘した。III-6b は、中央式では他の「去-」に先立っていち早く *[[○○]] になり、内輪式では *[[○○○]] となったと見た。しかしながら、少なくとも文献上は III-6b に想定した型として *[[ヒスイ<去上上> (翡翠) が占めている以上、旧案をそのまま認めるわけにもいかない。ひとまず保留しておくが、文献上に現れる「去-」は形態素の独立性の高いものに観られる傾向が顕著なので、古くは *[[○○○]] の語彙がもっとたくさんあり、そのうちの形態素の独立性の高いものが京都方言で去声を保持し、それが文献の上に反映されている可能性は残る。III-6 の二分についても、それとの関係でなお考えるべきであるが、今回は積極的に関わらないことにした。

13) 現代の関西方言では、これが変化して /[[ミ]タ/ になり、現在形の /[[ミル/ とはアクセントが大きく異なっているが、元はともに低進式で式保存がなされていた。かつて生成音韻論が盛んだったころ、この /[[ミル/ ~ /[[ミ]タ/ (あるいは /[[ミ]テ/) の交替を巡ってどのような基底形を立てるべきかが盛んに論じられたことがあったが、通時論と共時論は別であるにしても、歴史を知らずに展開されている議論に空しさを覚えるのみであった。

である。この解釈は旧案の(19)にもそのまま当てはまる。むしろ、その解釈のもとに、空き間となっている型を可能性のある単語で埋めたものが(40)である。(41)は、**下降式**(!)と**低進式**(, 低起平進式)の2つの式音調と、**下げ核**(j)と**昇り核**(i)の2核で解釈される。

これに従えば、類の数は、1拍語が5類、2拍語が8類、3拍語が12類あることになる。この結果を見て、対立数が多すぎて、子供が習得できる範囲を越えているのではないかという疑問を持つ人もいるかもしれない。しかしながら、整然とした体系をなして相互の区別は明瞭であり、きちんと発音し分けることに何の問題もない。現代伊吹島方言のもつ対立数に、下降式語末核型と去声始まりに対応する型とを組み込んだだけなので、言語として実在しうる体系であると考ええる。

(40) 本土諸方言祖体系音調型 (改訂案)

I-1	*[カ!!(蚊)	II-1a	*[カ!ぜ	III-1a	*[サカ!ナ
-2	*[ハ]](葉)	-1b	*[ミ!ゾ]]	-1b	*[トコ!ロ]]
-3	*キ(木)	-2	*[オ]ト	-2	*[ア!ズ]キ
-4	*[[ス(巢)	-3	*ヤマ	-3	*[チ]カラ
-5	*[[ハ]](菌)	-4	*ソ[ラ	-4	*アタマ
		-5	*ア[メ]](雨)	-5a	*イノ[チ
		-6	*[[ゴマ	-5b	*アサ[ヒ]]
		-7	*[[ハ]ギ(脛)	-6	*ウ[サギ
				-7a	*カ[ブ]ト
				-7b	*ク[スリ]]
				-8	*[[ヒスイ
				-9	*[[エ]ヤミ(疫)

(41) 本土諸方言祖体系のアクセント解釈

I-1	*!カ(蚊)	II-1a	*!カゼ	III-1a	*!サカナ
-2	*!ハ](葉)	-1b	*!ミゾ]	-1b	*!トコロ]
-3	*_キ(木)	-2	*!オ]ト	-2	*!アズ]キ
-4	*_][ス(巢)	-3	*_ヤマ	-3	*!チ]カラ
-5	*_][ハ](歯)	-4	*_ソ]ラ	-4	*_ア]タマ
		-5	*_ア]メ]	-5a	*_イ]ノ[チ
		-6	*_][ゴ]マ	-5b	*_ア]サ[ヒ]
		-7	*_][ハ]ギ	-6	*_ウ]サギ
				-7a	*_カ]ブ]ト
				-7b	*_ク]スリ]
				-8	*_][ヒ]スイ
				-9	*_][エ]ヤミ

7.4 祖体系からの変化

(19) と同じ再建形からの変化はすでに拙論(1988)で述べたので、ここでは省略し、新しく取り入れた部分だけを説明する。型の追加による旧説の変更は特がない。

高起群について、2拍以上の語末核型はいち早く第1類の無核型に合流し、現代方言には痕跡のみが残る。ウエニニ、ソノウエ]ニ、時とトコロガニ、～シタトコロ]ガなどの交替形をその反映と見る。

低起群について、去声始まりの単語は、京都方言では鎌倉期にすでに

(42) *[[○(-)]>[○(-)]

の変化を起こして高起群に合流した。東京方言もその流れを汲む。

去>上の同じ変化が、石川県白峰方言でも反映されている。具体例としては、

(43) !巢, 「歯」, !胡麻, !百合, 「マ]ズ, 「モ]シ, 「見]タ/など

である(新田哲夫2006: 78-79, ならびに私信)。伊吹島方言も同様である。

(44) /巢,「齒」,「胡麻」,「百合」,「マ」ズ,「モ」シ,「ヨ」ー (よく),「見」タ/など.

また, /シ]オン/もある (ただし, /]ヒスイ/は例外. 借用語か).

一方, 鹿児島方言は,「巢, 齒, 胡麻, 蛇, 脛」など, ほぼ規則的に B 類で出ており, 去声が低始まりの時代の特徴を反映している. ただし,「百合」はなぜか A 類である.「翡翠」も辞書には A 類とあるが借用語か. その他,「まず, もし」などが A 型であるのも課題として残る.

岩手方言などの外輪式では,「胡麻, 百合, 翡翠」などの「去上-」には無核型が対応するが,「よく, まず, もし」などの「去(平)-」は元の低始まりの特徴を反映し有核型(①型)が対応する. このことから,「去-」は「去上」においていち早く「上上」に変化したものと考えられる. 外輪式は, 祖体系の高起低起の別に非常に規則的に対応する. 各々の核の有無は関係せず, 高起なら無核に, 低起なら有核になるのである. その中で, 祖体系の*[[○○(-)だけは例外になる. このことは, *[[○○(-)>[○○(-)変化が起こった後で外輪式が分かれたことを意味する.

III-5a は, 四国で低平ら調を経て, III-4 とともに下降式化したものであろう. 一方, III-5b は [○]○[○]を経て一峰化により [○]○○に成ったものとする. 他地域では両者は合流した.

III-7b は, 内輪式方言と中輪式方言では III-6 に合流している. 他では, III-7a に合流した.

以上がその歴史の概略である.

参 照 文 献

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木 豊 (編) (1997)『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版.

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木 豊 (編) (1998)『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版.

上野和昭 (2003)「アクセント研究の動向と展望 1 (文献中心)」上野善道 (編)『朝

- 倉日本語講座3 音声・音韻』249-260. 朝倉書店.
- 上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」『岩波講座日本語5 音韻』281-321. 岩波書店.
- 上野善道 (1984) 「類の統合と式保存——隠岐の複合名詞アクセント——」『国語研究』47: 1-53.
- 上野善道 (1985) 「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40(2): 75-179.
- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (2)」『日本学士院紀要』42(1): 15-70.
- 上野善道 (1988) 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集 '88』35-73.
- 上野善道 (1996) 「アクセント研究の展望」『音声学会会報』211: 27-34.
- 上野善道 (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子 (監修), 国広哲弥・廣瀬 肇・河野守夫 (編) 『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』231-270. 三省堂.
- 上野善道 (2000) 「アクセントの比較研究」『音声研究』4(3): 22-23.
- 上野善道 (2002) 「アクセント記述の方法」佐藤武義・飛田良文 (編) 『現代日本語講座3 発音』163-186. 明治書院.
- 奥村三雄 (1990) 『方言国語史研究』東京堂出版.
- 金田一春彦 (1937) 「現代諸方言の比較から見た平安朝アクセント——特に二音節名詞に就て——」『方言』7(6): 1-43.
- 金田一春彦 (1943) 「国語アクセントの史的研究」日本方言学会編『国語アクセントの話』105-210. 春陽堂書店.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房.
- 金田一春彦 (1975) 『日本の方言 アクセントの変遷とその実相』教育出版株式会社.
- 金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語11 方言』129-180. 岩波書店.
- 佐藤栄作 (2006) 「第0次アクセントを考える」アクセント史資料研究会『論集』

II: 115-127.

- 添田建治郎 (1996) 『日本語アクセント史の諸問題』 武蔵野書院.
- 徳川宗賢 (1974) 「方言地理学と比較言語学」 『学習院大学国語国文学会誌』 17: 1-18.
- 新田哲夫 (2006) 『石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化』 科研報告書.
- 服部四郎 (1951) 「原始日本語のアクセント」 『国語アクセント論叢』 43-65. 法政大学出版社.
- 服部四郎 (1979) 「日本祖語について (21, 22)」 『言語』 8(11): 97-107, 8(12): 100-114.
- 松森晶子 (1993) 「日本語アクセントの祖体系再建の試み」 『言語研究』 103: 37-91.
- 松森晶子 (1995) 「下降式アクセントの由来と四国東北部諸方言の系統」 『東京大学言語学論集』 14: 557-581.
- 松森晶子 (1997) 「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」 『国語学』 189: 55-68.
- 山口幸洋・名倉仁美 (2001a) 「伊吹島方言の下降式アクセント分析」 『日本方言研究会第72回研究発表会発表原稿集』 49-62.
- 山口幸洋・名倉仁美 (2001b) 「伊吹島アクセントに重大な疑問」 『国語学会2001年度春季大会要旨集』 156-163.
- 山口幸洋 (2002) 「「伊吹島」アクセントの背景 社会言語学的事情と比較言語学的理論」 近代語学会編 『近代語研究11 松村明教授追悼論文集』 409-424.
- 和田 実 (1943) 「複合語アクセントの後部成素として見た二音節名詞」 『方言研究』 7: 1-26.

《要旨》

現代方言と古文献資料に基づき、本土諸方言のアクセント祖体系を考える。高起群には従来の「高高高高…」の式音調を改訂して「高高中中…」の下降式を建てる。低起群には去声始まりのアクセント型などを組み込む。全体として、下降式と低進式の2つの式、それに昇り核と下げ核の2つの核からなる、従来よりも対立数を増やした私案を述べる。

Abstract**On the Reconstruction of Japanese Accents**

Zendo UWANO
(University of Tokyo)

Based on the modern dialects and ancient documents I propose a proto-accent system of the mainland Japanese dialects. For the high-beginning series I hypothesize the falling pattern of the form HHMM- instead of the high-level pattern HHHH-. For the low-beginning series I incorporate the Kyosei tone—that is, words with the rising pitch—into the system. On the whole, the proto-system consists of the two tonal patterns, falling and low-level, and the two accent kernels, rising and lowering, and the system contains more oppositions than that previously proposed.

(受領日 2006年11月22日 最終原稿受理日 2006年11月25日)